

とき 平成二年七月二十一日～九月二日

ところ 県立甘木歴史資料館

四 記念講演会

シンポジウム『種痘の始祖、緒方春朔先生に学ぶ』

講師 順天堂大学医学部医史学助教授 酒井シヅ

甘木朝倉医師会顧問 井上無限

元県立朝倉高等学校長 松岡 暉

九州大学文学部講師 柴多一雄

コメンテーター

久留米大学医学部免疫学教授 横山三男

司会 甘木朝倉医師会理事 富田英寿

とき 平成二年七月二十八日(土) P M 2・00～4・30

ところ 甘木文化会館

約八〇〇名の聴衆に深い感銘を与え盛会に終る。また『シンポジウム講演記録集』を編集発行した。

五 広報教育映画製作

タイトル『種痘の始祖、緒方春朔』地域の各学校等に寄贈

六 秋月顕彰碑補修整備

昭和二年に当医師会が建立した顕彰碑を整備し、説明板を新に設置。

尚、今回の顕彰事業を機に数々の新知見が得られたことは、春朔先生を敬う何よりの顕彰となったと考えられる。

一 ドイツ衛生博覧会出展後、伝染病研究所に寄贈され、行方不明となり戦災で焼失したものとされていた春朔の遺品が、大

塚恭男先生の御尽力で北里研究所で発見されたこと。

一 春朔の第三の種痘書『種痘證治録』が発見されたこと。

一 長い間、議論されていた『種痘必順弁』の順について「順」か「須」かの問題は、今回の顕彰事業に伴う調査やシンポジウムで「順」と決着がついたこと。

一 春朔の種痘法が幕府から認められていただけではなく、当時の朝廷(小森典葉頭)からも認められていた事実がはっきりしたこと。

一 天野甚左衛門の墓地の所在が判明したことなどがあります。

このたびの記念事業に引き続き、甘木歴史資料館に、常設の「緒方春朔コーナー」を設置しました。今後も地元先達の偉業を偲び、我々医師を初め、医療関係者の医学、医療に対して気構えを新たにするとともに、地域の人々、とくに次の世代を担う子供達にもこの先達の偉業を広く知らせ、郷土に誇りを持ち新しい世代、社会を切り開いていく糧にしていってほしいと願ひの長い活動をして行く所存であります。

(甘木朝倉医師会理事 富田 英寿)

第一五回谷口財団国際シンポジウム

一 五年前の昭和五十一年、故・小川鼎三先生と東洋紡会長・谷口豊三郎氏の深い友情に支えられて始められた「国際比較医学史シンポジウム」(The international symposium for the comparative

history of medicine: East and West) の第一五回が、平成二年八月二十六日から一週間、内外の医史学研究者を集めて富士の裾野市にある富士教育研修所で開催された。

今年のテーマは「伝統医学の生命観」(The comparison between concept of life-breath in East and West Medicine) で、ブネウマ・プラーナ・気といった世界に展開された古代の生命観の比較医学史がディスカッションされた。

今回は以下の日程で進められた。

組織委員：川喜多愛郎(千葉大学) 山田慶兒(国際日本文化研究センター) 大塚恭男(北里研究所附属東医研) 酒井シヅ(順天堂大学) ピーターソン・鳥海壽子(アシスタント)

八月二十六日 〔開会式〕

八月二十七日

〔セッション一〕 古代中国における気の問題 林克(大東文化大学) コメント：K. Zysk(米・ニューヨーク大学)

〔セッション二〕 中国古代の生命哲学と中国伝統医学における気の問題 劉長林(中国社会科学院) コメント：菱谷邦夫(京都大学)

八月二十八日

〔セッション三〕 周天功―体内における気の問題 三浦國雄(大阪市立大学) コメント：栗山茂久(米・エモリー大学)

〔セッション四〕 古代インドの医学伝承におけるプラーナの問題 K. Zysk コメント：三浦國雄

八月二十九日

〔セッション五〕 十八世紀ヨーロッパにおける生命力の思想

Jaayna(英・マンチェスター大学) コメント：林克

八月三十日

〔セッション六〕 一氣留滯説と万病一毒説―江戸時代古方派における気を受容 花輪寿彦(北里研究所東医研) コメント：劉長林

〔セッション七〕 道氣―神と人の間の存在 菱谷邦夫 コメント

ト：L. Jaayna

八月三十一日

〔セッション八〕 プネウマ・気と呼吸の問題 栗山茂久 コメント

ト：花輪寿彦

〔セッション九〕 風と呼吸と生命 山田慶兒

九月一日 自由討論・閉会式

各セッションには以下のゲストも参加し、討論がなされた。

林真理(東京大学)・石用秀実(九州国際大学)・小曾戸洋(北里研究所東医研)・松下正明(東京大学)・真柳誠(北里研究所東医研)・白杉悦雄(京都大学)・武田時昌(信州大学)・福永光司(北九州大学)。

本シンポジウムは例年の如く、予め提出されている英文ペーパーに基づき演者が要約を述べ、コメントイターが論議すべき点を指摘して総合ディスカッションに入るというもので、ひとつのセッションに三時間もかけるという贅沢で充実した内容であった。どれも難しいテーマのためか、どのセッションも結論を得ることができなかったが、私のように医学のごく狭い分野しか知らない

者にとって、他のとくに人文科学系の諸先生の御意見は大変勉強になった。

とくに山田慶兒先生の適切なコメントが印象的であった。

夕食後はゲストの特別講演や折り紙・習字・太極拳などで国際親睦をという粋な企画がなされた。おそらく参加者全員が通常の学会やカンファランスでは得られない充実した日々を過ごされたことと思う。

またこのシンポジウム開催にあたって裏方で終始準備・運営に尽力された酒井シヅ先生、島海壽子さんら順天堂大学医史学研究室のなみなみならぬ御苦勞に深謝したい。

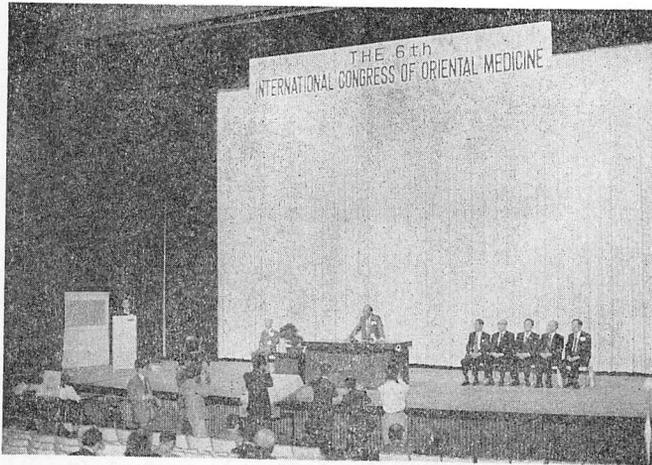
なお残念なことといえはヨーロッパの医学史に造詣の深い川喜田愛郎先生が突然の御病気で欠席されたことであつた。先生の日も早い御回復をお祈りしたい。

またこのようなすばらしいシンポジウムが今後も引き続き開催されることを関係各位および谷口氏に切に願ひたい。

(花輪 寿彦)

第六回国際東洋医学会・医史学シンポジウム

十月十九日から二十一日の三日間、東京の国立教育会館にて第六回国際東洋医学会（ICOM）が開催された。当学会では左記の二つの医史学シンポジウムがあり、内外研究者の発表と討論が日・英・中の同時通訳でなされた。



○シンポジウムⅥ「医学文献と学術交流の歴史」(十月二十一日、午前九時〜十一時、座長：大塚恭男(日)、エルス・マリー・アンバッケン(スエーデン)▽

一 中国・朝鮮・日本における医学文献の伝播—十二世紀以前
小曾戸 洋(北里研・東医研)

二 東西交流

史に見る

医薬文化

東野治之

(大阪大

学)

三

日本と中

国・朝鮮

間の医学

文献と学

術の交流

—十三世

紀以降

真柳誠

(北里研・

東医研)

近代中国

における

伝統医学

四